

里山, 里海の語法と概念の変遷

中村俊彦^{1,2}・本田裕子²

¹千葉県立中央博物館

²千葉県生物多様性センター

1. はじめに

里山, 里海は, 近年, 一般にも用いられる言葉になってきている. 特に里山については, 中学や高校の教科書でも紹介され, その自然環境と人とかかわりなどが紹介されるようになった. 里山や里海は, いずれも山から海に至る日本の多様な自然のなかでの人の生活や暮らしとその周辺の自然とが関係しもたらされた空間である. 多くの日本人にとって, この里山や里海という言葉の響きは, かつての田舎の自然とともになつかしい文化なども連想させる言葉でもある.

千葉県では, 2003年5月に里山条例(千葉県里山の保全, 整備及び活用の促進に関する条例)を制定し, 県民と一体となった里山の保全と利用等に関する取り組みを進めてきた. また東京湾の干潟と人々のかかわりに関して里海という言葉で語られることも多くなっている. さらに2008年の「生物多様性ちば県戦略」においては里山, 里海に加えて里沼の概念も提案されており, 千葉県は里山, 里海, さらに里沼については最も普及し一般の人々に関心の大きい地域と言えよう.

最近では, 里湖, 里川などの語彙も使われてきている. しかし里山, 里海などの言葉のとらえ方やその意味するものは定まっているわけではない. 言葉の定義や使い方も人それぞれであり, 混乱が生じている所も見受けられる. 今回は, 里山, 里海に関するさまざまな言葉の語法を通じ, 里山, 里海の概念及びその変遷等についてまとめた.

2. 「里」と「山」の語法

「里(さと)」という文字は, 「田」と「土」から成る. 「田」は, 整理された生産地の象形, 「土」は土地神を祀る「ほこら」の象形を意味する(新漢語林, 2004, 大修館書店). すなわち, 里とは,

「田地・土地神の「ほこら」のあるところ」を意味し, 自然の中で暮らす人々の願いとそれを通して形成された土地の姿を示す言葉といえる.

かつて「里(リ)」は行政単位としても用いられていた. 645年の大化の改新以後に定められた国郡里制では, 1里は人家50戸の区域を示した(図1). しかし715年の大宝律令に基づく郷里制においては, これまでの里(50戸)を「郷」とし, 1郷を新たに2, 3の里に分割した(広辞苑-第五版, 1998, 岩波書店). この変更により, 行政単位の細分化および農民把握が強化されたが, 同時に各地の土地条件に根ざした自然村を行政単位と位置づける状況がつけられた. ちなみに「郷(さと, ゴウ, キョウ)」は, 「里(さと, リ)」とともに, 例えば「故郷(古里)」に代表されるように, 生まれ育った自然・風土や人々とのふれあい, また社会の姿, さらにその思い出の情景などとともに用いられる. また郷は, 「饗」の原字とされ, ごちそうを中にして二人が向き合うさまを示す意味とともに「置」に通じ, しきられた耕地の意味もある(新漢語林, 2004, 大修館書店).

一方の「山(やま)」は, その地形等において突出した形状を示すものであるが, 東北や四国においては「森」のつく山名も多い. この山と森との語法において, 浅井(2005)は「昔から山は神や祖霊の住む地と信じられ, したがって山そのものが神であり, 神の住むところが森であった」と述べている.

「山」は「森(もり)」「林(はやし)」とともに, 日常的に多く使われる語彙である. 岩松(2008, 2009)は, 「森や林がそれぞれ盛る, 生やすという動詞が名詞化しているのに対し, 『山』は名詞としての安定性から複合語をつくりやすい」ことを指摘し, さらに「里山(さとやま)」が現代に広く

浸透している背景については、「古来の日本語に多かった名詞と名詞からなる4音節の安定した複合語で、日本人にとっては『やま』の造語力が働き、馴染みやすい言語的な秩序を持

つことも一要因として考えられる」としている。

3. 「里山」と「奥山」の語法

「里山」の用語が登場するこれまでに知られ

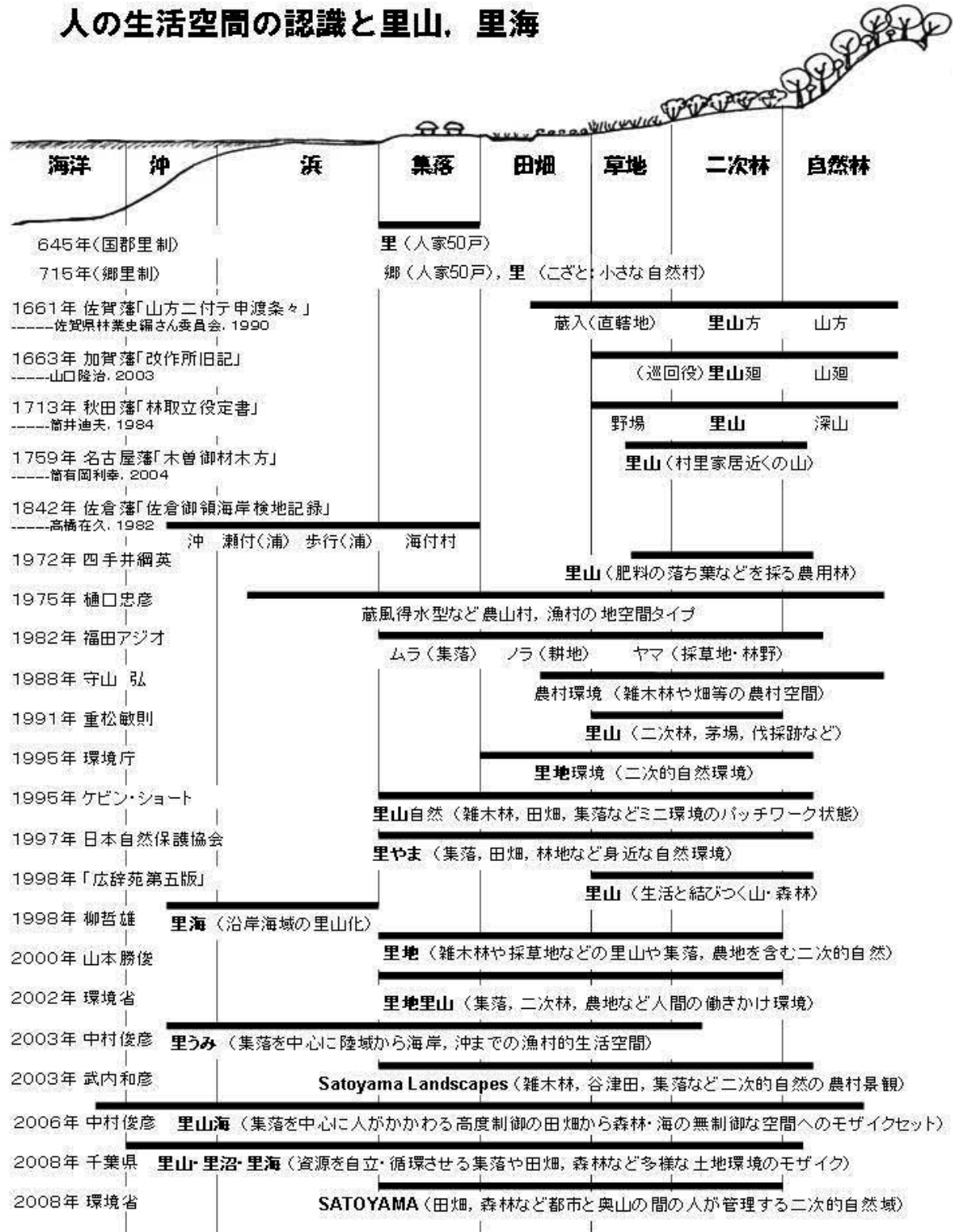


図1 人の生活空間の認識と里山, 里海

る最も古い史料として、1661年の佐賀藩「山方ニ付テ申渡条々」(黒田, 1990)が上げられる。これには「山方, 里山方, 蔵入」という言葉が、それぞれ、山の土地, 里山の土地, 直轄地の意味で用いられている。1663年の加賀藩「改作所旧記」でも、「山廻役」(巡回役)として「奥山廻」と「里山廻」が記述されている(山口, 2003)。また、筒井(1984)によれば、1713年秋田藩「林取立役定書」において、林役人の支配する範囲として、「深山, 里山, 野場」が示されている。有岡(2004a)も、1759年の尾張藩「木曾御材木方」において「村里家居近き山をさして里山と申候」と用いられていることを指摘している。

このように里山は、江戸時代の林政史料にしばしば登場する言葉である。これはほとんどが「人里近くの農用林や薪炭林など、人が日常生活にかかわる林地」という意味で用いられている。このような里山の林地, すなわち里山林については、主に、土地本来の原生的な自然林, この自然林に人手が加えられた二次林, さらに用木が植えられた人工林の大きく3つに区分される(服部ほか, 1995)。

里山に対し「奥山(おくやま)」および「深山(みやま, ふかやま, しんざん)」は、ともに「人里を遠く離れた山の中」「奥深い山」(大辞泉, 1998, 小学館)と定義されている。昭和初期の東北地方では、山仕事において、日帰りできる山を「里山」、寝泊りして仕事をする山については「奥山」または「深山」として区別していたとされる(有岡, 2004b)。なお前述の史料, 1663年の加賀藩「改作所旧記」に記述のあった「奥山廻役」は、「新川郡の黒部奥山」がその範囲として特定されている。この黒部とは、富山県の黒部峡谷を指し「奥山廻役」のみが立ち入ることができる場所であった。したがって、奥山は、単純に距離が遠いだけでなく、黒部峡谷に見られるような秘境, 原生自然環境を含めて想定されていたと考えられる。

1716年に秋田藩の二人の林取立役(林務官)が書いた、農民から里山を取り上げた藩への上申書が残されている。これは、農民から里山を取り上げた藩の政策に対し変更を求めるものであり、「農民の深山への立ち入りを抑え、水源や防災に

も重要な深山が荒れていくのを防止するには、郷中で守られた深山また里山については「明山(森林利用等を農民に許可する山)」とし、さらに「郷山(村に管理させる山)」と定めれば、深山に人馬が立ち入ることがなくなり、むしろ「留山(入会を制限し禁伐の山)」としてしっかり守っていける」ことを提案している(秋田県, 1973; 筒井, 1984)。

4. 近代化・都市化における里山の評価

1970年以降の日本では、近代化, 都市化により多くの森林・林地が荒れ, また消失が進んだ。しかし、その保護・保全の対象は、木材生産のための森林や国立公園等の原生的森林域に偏っていた。したがって、農用林・雑木林などの二次的な森林・林地では、その経済的価値の低下等によって放置され, また都市開発やレジャー開発等で造成・破壊される状況が進行していった。

その状況を示す顕著な対策として、林野庁の「里山再開発事業」(藤沢, 1969)がある。低位利用の広葉樹林と間伐適期針葉樹林が対象となり、「里山が存在するという事は、そのまま受けとれば、林道開設等が遅れていたので里山の開発利用が進捗しなかったと理解される」(黒川, 1968)、また「森林資源の合理的利用と伐採跡地の人工林化等による高度な土地利用をはかる必要がある」(松田, 1968)と述べられているように、里山は林業振興のための開発の対象として位置づけられていた。

このように里山が開発, 人工林化されていくなかで、四手井(1972a; 1972b)は「薪炭や落ち葉, さらには山野草の採集の場として人々に利用されてきた人里近くの農用林すなわち里山」に注目しその多様な価値を指摘した。近年この里山という言葉が広められたのは、この森林生態学者の四手井綱英によるところが大きい。

その後、農用林等の里山は「第4次全国総合開発計画(1987年閣議決定)」における森林区分の一つ「里山林」として位置づけられた。他には「奥山天然林」「都市近郊林」「人工林」があげられたが、里山林は「農山漁村集落周辺にあり、かつては薪炭生産など人と深いかわりを有していた森林であり、多様な樹種で構成されている」とされ、「児童生徒の学習の場や山村におけ

る都市との交流拠点」としての取り上げられ方など、その存在は肯定的になっていった。

5. 里山的自然環境の空間認識

日本の生活空間への認識において、里山的な空間領域がどのように位置づけられてきたかについて、樋口（1981）は日本の多様な地形環境と風水思想における土地利用形態に基づき、日本各地の集落、景観の地空間タイプを分類した。そのなかで多くの集落がつくられてきた「山の辺」の景観については「葎風得水（ぞうふうとくすい）型」、すなわち、「背後に山を負い、左右は丘陵に限られ、前方にのみ開いている」タイプとして、その安定した生活環境を認識した。また、福田（1982）は、集落を中心として、それを取り巻く自然とのかかわりについて「ムラ（集落）、ノラ（耕地）、ヤマ（採草地・林野）」の同心円状の空間構造を指摘した。

このような空間認識は、森林伐採跡地やその遷移途中の草地・林地としての里山だけではなく、里山とその自然に根ざした生活空間への認識へ広がった。守山（1988）は、雑木林や畑等から成る伝統的な農耕文化がもたらした豊かな「農村環境」は、遺存種を含む多くの生物を守ってきたことを示すとともにその重要性を説いた。後に、この農村環境については、谷津田を中心に水田の重要性についても指摘している（守山，1997）。

ショート（1995）は、「さまざまな少しずつちがった『ミニ環境』がパッチワーク状態にまじりあっている」場所を「里山自然」として捉え、その自然環境の多様性を「パッチワーク」として注目した。中村（1995）は、伝統的農村の自然環境の豊かさと資源・エネルギーの自立的な生態系に注目し、集落およびその周辺の田畑や雑木林等の人とかわる自然環境のモザイク的な空間配置の領域を「伝統的農村・里山自然」（中村，1997）とした。さらにその生物多様性の豊かさを理論づけるとともに、歴史的経緯と文化を含めた自然と人間の一体的まとまりについては、沼田（1996）の人・自然・文化のシステム「景相」の概念を適用し、集落を中心とした人・自然・文化の一体的まとまりの空間領域を「景相単位」（中村，1999）として捉えた。

6. 里山の重要性と周辺領域

里山について、1990年代以降、生態学的な研究が進む。重松（1991）は「二次林、茅場、伐採跡地」を里山と位置づけ、その状態と人の手入れや管理と生物相との関係をまとめている。関東の平地林の里山についてもさまざまな研究がなされた。犬井（1992，2002）は同じく関東地方の里山平地林を谷津田・稲作とのかかわり、また海の里山としてマングローブ林についての研究等から、自然と人間の共存の鍵として、循環的、永続的な里山地域とともにその状態をもたらした二次林文化の重要性を指摘した。また藤井（1995）は、農村生態系の指標としての里山を、堆肥利用、燃料利用、その他の利用とのかかわりで調査分析し、循環系としての里山及びその循環型技術の再評価の重要性について論じた。

このように里山が研究対象になった背景には、80年代以降のリゾート開発、特にゴルフ場建設による里山の開発が行なわれるようになったことが挙げられる。それは同時に、全国各地で開発と保護との議論が展開され、里山の認識とその重要性が再評価された時期といえる。このような状況のなか1992年「原生林・里山・水田を守る！」をテーマとして、「第5回日本の森と自然を守る全国集会」が開催され、原生自然から里山・水田にいたる自然を一連のものとしてとらえ、その状態を象徴する生物を保護するとともにバランスのとれた農山漁村の再生を目指す宣言がなされている（栗野・草刈，1993）。また、長年にわたって近畿地方の里山研究を牽引してきた田端（1997）は「里山林だけでなくそれに隣接する中山間地の水田やため池、用水路、茅場なども含めた景観を里山とよぶ」とし、その生物の生息・生育環境や水源涵養、水質浄化と人の住環境とのかかわりの重要性について論じている。

7. 里山概念の拡大

国語辞典としては初めて里山を掲載した広辞苑 - 第5版（1998）では、里山を「生活に結びつく山・森林」としている。前述したように江戸時代からの語法をみても、里山は里近くの山及び森林を意味する言葉であった。しかし、この里山と人間とのかかわりは周辺環境との一体的なものであ

り, 多様な環境とのつながりにおいて里山が理解され, その重要性の認識が図られてきた. すなわち「里の山」から「里と山」という概念拡大の方向性である. 特に, この広範かつ多様な複合領域としての里山認識の方向性は, とりわけ保護・保全する立場で里山にかかわる人々の間で強く, それを決定的にするきっかけが2005年の愛知万博での里山論議であった.

1996年, 当時の通商産業省からの愛知万博計画の発表を契機に, これまでの里山という言葉の使い方を見直す大きな動きが生まれた. この万博構想では「自然の叡智」をテーマとし, 「身近な自然の里山を人と自然のかかわりの実験場」とする位置づけがなされたが, その内容は森林・林地を残す一方で, 集落をはじめ田畑やため池などの周辺の環境はパビリオンや公園にする計画であった. しかし, この計画に対しては多くの異議が出され(日本自然保護協会, 1997), その結果, 森林・林地と周辺環境との一体的つながりの重要性の観点からその万博計画は大きく修正された. このような状況のなか日本自然保護協会は, 地域の自然保護にかかわる市民・NPOをはじめ生態学や地形学等の研究者との議論のなかで「林地・雑木林のみならず田畑や草原も含めた地域の特有の顔」を共有することの重要性から, あえて「里やま」を用いた, 第1回の「全国・里やまの自然しらべ」を実施した(中井・森本, 1997). その結果, 谷戸タイプ, 平地林タイプ, 斜面林タイプ, 山地タイプ等の「里やま」の現状認識とその多様な価値観及び課題についてまとめられた(日本自然保護協会, 1998). その後, 1999年にも「自然しらべ'99里やま」が実施され, 日本各地の現状と課題が浮き彫りにされ, 各現場の保全に向けた対策が議論された(石井, 2005).

この愛知万博問題に関して, 農用林等の里山と一線を画し, 「伝統的農村・里山自然」の特徴及び価値を生物多様性保全の観点から論じた中村(1997; 2004a)も, 「里やま」を「集落を中心に森林や田畑, 川沼などさまざまな自然環境のモザイクのセット」とし, その野生動植物との関係をはじめ人の生活・生業から教育・文化や都市化等広く生物多様性と生態系のかかわりについて概括した.

茨城県自然博物館(2001)が実施した小学生を対象にしたアンケートでは, 「里山だと考える場所」について, その具体的な姿としては「雑木林」が最も多かった. しかし, 「小川」「丘陵地」「ため池や沼」「谷津田や棚田」なども多く回答されている. このような, 人々の多様な里山のとらえ方を受け, 2003年に千葉県で制定された「里山条例(千葉県里山の保全, 整備及び活用の促進に関する条例)」では, 里山の定義として「人が日常生活を営んでいる地域に隣接し, 又は近接する土地のうち, 人による維持若しくは管理がなされており, 若しくはかつてなされていた一団の樹林地又はこれと草地, 湿地, 水辺地その他これらに類する状況にある土地と一体となっている土地をいう」とし, 人々の生活と広くかかわる多様な環境の空間を里山として定義した.

現在使われている中学や高校の教科書でも, 里山の重要性が記述されているが, 教科書によって, 里山を農用林等の林地に限定して用いているものと, 里山林のほか集落を含めた様々な自然環境のセットとして捉えるものがある. (例えば, 東京書籍「中学理科2下」(2006)では「人里近くにあつて, 人間が維持, 管理してきた山林」, 啓林館「未来へひろがるサイエンス第2分野(下)」(2007)では「集落の近くで人の手によって維持・管理されてきた森林やその周辺地域のこと」と記述されている).

このように, 人々の間での里山という言葉の使われ方やその空間認識の違いが明らかになる中で, 里山林以外のその周辺環境については里山という語を用いず「里地」とする流れも生まれている. 1994年, 当時の環境庁は「環境基本計画」において, 人口密度が比較的 low, 森林率がそれほど高くない二次的自然の多い地域を「里地自然地域」と位置づけている. 山本(2001)は「里山と農耕地, 居住域とが一体となって形成していた農村空間」として, 里山を含めた空間を「里地」としている. その流れを受けて, 環境省は2002年, 「新・生物多様性国家戦略」において, 「里地里山」と里地と里山の両方を併記し, 「集落, 二次林, 農地など人間の働きかけ環境」としている.

里山を日本に限定した特殊な事例ではなく, アジア諸国を中心に広く世界にもみられるものとして

英語表記する流れもある。Takeuchi *et al.* (2003) は“Satoyama Landscapes”を the broader area of secondary nature, including satoyams, as well as cultivated lands, human settlements として示した。環境省 (Ministry of the Environment, Government of Japan, 2008) も, 「自然との共生の智慧と伝統を発展・活用すること」を“SATOYAMA イニシアティブ”とした。ここでの“SATOYAMA”は, “The Japanese countryside landscape composed of managed environments that have been created and maintained within the lifestyles of local people engaged in farming and forestry”とされたが, その後は, “Satoyama Landscapes”の語法を用い “The complex rural ecosystem formed by the combination of Satoyama and these other environment is called Satoyama Landscape”としている (Ministry of the Environment, Government of Japan, 2009)。

2008年G8環境大臣会合の議題の一つに「生物多様性」がとりあげられたことから, 生物多様性保全と持続的な利用のあり方を議論することを目的に「G8環境大臣会合開催記念シンポジウム“アジアからの発信・人と自然の共生のみちをさぐる”」が, 2008年4月に兵庫県立人と自然の博物館において開催された。そこでは, 日本の里山 (SATOYAMA) にみられる持続的な自然資源の利用および現状についての報告とともに, アジア諸国においても里山に類似する二次的な自然環境や里山の伝統手法 (Satoyama-like traditional practices) が存在することが認識された。また, そこでみられる「人は自然の一員である」というアジアの人々に共通する自然観が, 地球の持続性という観点からも非常に重要であるとの考えも示された (環境省, 2008)。

2008年5月には, オーストリアのビエナにおいて開催された生物文化多様性保全に関するシンポジウム「Preservation of Bio-cultural Diversity - A Global Issue」において, “SATOYAMA-Endangered bio-cultural diversity”のセッションが設けられ, 生物文化の多様性保全の観点から日本の里山とそこでの自然と人間のかかわりが報告され, その重要性や保全について議論された (Eser, 2009; Kieninger *et al.*, 2009; Ohsawa and

Kitazawa, 2009)。

8. 「里海」と「里山・里海 (里山里海)」の概念

自然と人間のかかわりによって育まれた豊かな自然環境の里山の考え方にならって, 「里海」という考え方も登場する。柳 (1998) は「沿岸海域の里山化」として「里海」を用い, 「人手が加わることにより, 生産性と生物多様性が高くなった沿岸海域」(柳, 2006)と定義した。この里海から, さらに里に川, 湖も関係づけた「里川」「里湖」の語彙も用いられている。「里川」に関しては, 明確な定義がなされていないが, 「人びとにとって身近な川」(鳥越, 2006)とされ, また, 「里湖 (さとうみ)」は主に琵琶湖を対象に生成された用語であり, 生業を通じて生成された住民と自然との関係を「里」という語に反映させている。

海岸域の自然環境については, 1842年の佐倉藩「佐倉御領海岸検地記録」において東京湾の「海付き村」の空間構造に記述が残されている。それによると, 海岸から沖へのゾーニング構造として, 歩行 (かち), 瀬付, 沖という語が用いられ, その水産資源の利用・管理の状況が記録されている (高橋, 1982)。この文脈を受けて, 中村 (2003) は, 「海域の里海とともにその周辺の漁村および人の生活とかかわる海辺の自然環境のセット」を「里うみ」として位置づけた。さらに, これを里山と一体化させて, 集落を中心に人が高度制御の田畑から森林・海の無制御な空間までの人・自然・文化の一体的まとまりのモザイクセットとして「里山海」(中村, 2006a ; 2006b) という概念を提示している。さらにこの概念の中には, 里海の外域であり陸の奥山に対応する海域, すなわち「漁労の限界として山の見えなくなる沖合」として「大灘」の領域を加えている (中村, 2009)。

千葉県 (2008) では, このような広域概念の重要性に基づき, 県内にある印旛沼や手賀沼の内水面の存在をふまえ, 資源を自立・循環させる集落や田畑, 森林など多様な土地環境のモザイクとして, 「里山・里沼・里海」を提示した。一方, 京都大学フィールド科学教育研究センターでは, 森から海までに及ぶ範囲を含めた統合的管理の構築を目指し「森里海連環学」講座を開設したが,

「流域や河口域に集中する人間を中心とした生態系」として「里」を捉えている(山下, 2007)。

2006年に国連大学高等研究所を事務局として立ち上げられた「日本における里山・里海のサブ・グローバル評価(里山里海SGA)」は、2001年—2005年に国連が世界各地で実施した「ミレニアム生態系評価(MA)」のサブ・グローバル評価の枠組みを適用しておこなわれている。ここで用いられる「里山・里海(里山里海)」の概念については、「社会と生態系のかかわる複合システム」また「動的でモザイク状のランドスケープ」を基にその定義に関する議論が進んでいる。

里山里海SGAのサイトの一つである千葉県では、里山条例やこれまでの多くの里山, 里海の保全や利用等に関する活動や調査研究の成果をふまえ、集落をはじめ森林や田畑, 川沼等から成る人・自然・文化のシステム, すなわち「景相」(沼田, 1996)概念に基づく多様な環境の複合領域を「里山里海」として据え、その現状調査や課題の分析等を進めている。すなわちこの「里山里海」は、単に「里山」と「里海」を接続させた概念ではなく、人の生活・生業を中心とした人・自然・文化の調和・共存の在りよう及び将来に向けての持続可能な生態系モデルとしての意味合いを含め、その調査分析をおこなっている。

9. 引用文献

- 秋田県(編). 1973. 秋田県林業史上巻. 671pp. 秋田県
- 有岡利幸. 2004a. 里山Ⅰ. 262pp. 法政大学出版会, 東京.
- 有岡利幸. 2004b. 里山Ⅱ. 265pp. 法政大学出版会, 東京.
- 浅井健爾. 2002. 日本の地名雑学事典. 237pp. 日本実業出版社, 東京.
- 栗野宏・草刈広(編). 1993. 原生林・里山・水田を守る!. 290pp, 無明舎出版, 秋田.
- 千葉県. 2008. 生物多様性ちば県戦略. 175pp. 千葉県
- Eser, U. 2009. Ethical perspectives on the preservation of bio-cultural diversity. *Die Bodenkultur* 60(1):9-14.
- 藤井英二郎. 1995. 農村生態系の指標としての里山. In 大沢雅彦・大原隆(編), 生物-地球環境の科学, pp. 179-189. 朝倉書店, 東京.
- 藤沢秀夫. 1969. 里山再開発事業. *林野時報* 17(3): 7-9.
- 福田アジオ. 1982. 日本村落の民俗的構造. 368pp. 弘文堂, 東京.
- 服部保・赤松広治・武田義明・小舘誓治・上甫木昭春・山崎寛. 1995. 里山の現状と管理. *人と自然* 6: 1-32.
- 樋口忠彦. 1981. 日本の景観—ふるさとの原型. 269pp. 春秋社, 東京.
- 茨城県自然博物館編. 2001. 第22回企画展 人と自然のコミュニティスペース「里山」. 35pp. ミュージアムパーク茨城県自然博物館, 茨城.
- 犬井正. 1992. 関東平野の平地林. 162pp. 古今書院, 東京.
- 犬井正. 2002. 里山と人の履歴. 361pp, 新思索社, 東京.
- 石井実(監)・日本自然保護協会(編). 2005. 生態学からみた里やまの自然と保護. 242pp. 講談社, 東京.
- 岩松文代. 2008. 文化研究における「森林」とは何か—日本語の語彙からの検討. 第119回日本森林学会大会口頭発表.
- 岩松文代. 2009. 「やま」「もり」「はやし」と「森林」の言語的關係—「森林文化」の領域についての考察. 第120回日本森林学会大会口頭発表.
- 環境省. 2008a. G8 環境大臣会合開催記念シンポジウム アジアからの発信 人と自然の共生のみちをさぐる. 232pp, 環境省自然環境局自然環境計画課.
- 黒田迪夫. 1990. 佐賀藩の林野制度. In 佐賀県林業史編さん委員会(編), 佐賀県林業史, pp. 21-42. 佐賀県.
- 黒川任之. 1968. 里山再開発構想を舞台とする林業生産集団化促進対策. *林野時報* 15(7): 7-14.
- 松田堯. 1968. 里山再開発事業の概要. *林野時報* 15(7): 2-6.
- Ministry of the Environment, Government of Japan. 2008b. "SATOYAMA: THE JAPANESE COUNTRYSIDE LANDSCAPE", Nature Conversation Bureau, Ministry of the Environment, Government of Japan: 8pp.
- Ministry of the Environment, Government of Japan. 2009. "SATOYAMA: A Vision for Sustainable Rural Societies in Harmony

- with Nature”, Nature Conversation Bureau, Ministry of the Environment, Government of Japan : 8pp.
- Kieninger, P. , W. Holzner and M. Kriechbaum. 2009. Bio-cultural Diversity and Satoyama: Emotion and the fun-factor in nature conservation- A lesson from Japan. Die Bodenkultur 60(1):15-21.
- 守山弘. 1988. 自然を守ることはどういうことか. 260pp. 農山漁村文化協会, 東京.
- 守山弘. 1997. 水田を守るとはどういうことか—生物相の視点から. 205pp. 農山漁村文化協会, 東京.
- 中井達郎・森本信也. 2007. 全国一斉しぜんしらべ 97. 自然保護 416 : 2.
- 中村俊彦. 1995. 谷津田農村生態系の景相生態学的アプローチ. In 沼田真(編), 現代生態学とその周辺, pp. 342-351. 東海大学出版会, 神奈川.
- 中村俊彦. 1997. 日本の農村生態系の保全と復元Ⅲ : 伝統的・里山自然の重要性と保全. 国際景観生態学会日本支部会報 3(4) : 57-60.
- 中村俊彦. 1999. 農村の自然環境と生物多様性. 遺伝 53(4) : 56-60.
- 中村俊彦. 2003. 海と人のかかわりの回復と今後の展望—江戸の里うみへBack to the future—. 月刊海洋 35(7) : 483-487.
- 中村俊彦. 2004a. 里やま自然誌. 128pp. マルモ出版, 東京.
- 中村俊彦. 2004b. 千葉県の自然と農山漁村のかかわり. In(財)千葉県史料研究財団(編), 千葉県の自然誌本編 8 : 変わりゆく千葉県の自然, pp. 312-318. 千葉県.
- 中村俊彦. 2006a. 里やま・里うみの景相生態学と構築環境デザイン. 建築雑誌 121(1549) : 24-27.
- 中村俊彦. 2006b. 里山海の生態系と日本の Sustainability. 応用科学学会誌 20(1) : 11-16.
- 中村俊彦. 2009. 「里山・里海」「里山海」と「奥山」「大灘」. 東京湾学会誌 3(1) : 14.
- 日本自然保護協会編. 1997. 2005年愛知万博構想を検証する—里山自然の価値と「海上の森」. 141pp. 日本自然保護協会, 東京.
- 日本自然保護協会. 1998. みんなで守る里やま. 自然保護 423 : 1-13.
- 沼田真. 1996. 景相生態学: ランドスケープエコロジー入門, 178pp. 朝倉書店, 東京.
- Ohsawa, M. and T. Kitazawa. 2009. Bio-cultural diversity and functional integrity of Japan's rural landscape. Die Bodenkultur 60(1):31-40.
- 重松敏則. 1991. 市民による里山の保全・管理. 74pp. 信山社, 東京.
- ショート, ケビン. 1995. ケビンの里山自然観察記. 203pp. 講談社, 東京.
- ショート, ケビン. 2003. ドクター・ケビンの里山ニッポン発見記. 247pp. 家の光協会, 東京.
- 四手井綱英. 1972a. マツとマツ林. 自然 316 : 24-25.
- 四手井綱英. 1972b. 水田の稲掛け. 自然 319 : 22-23.
- 田端英雄(編). 1997. 里山の自然, 199pp. 保育社, 大阪.
- 高橋在久. 1982. 東京湾水土記. 280pp. 未来社, 東京.
- Takeuchi, K. , R. D. Brown, I. Washitani, A. Tsunekawa, M. Yokohari (eds.) 2003. “Satoyama: The Traditional Rural Landscape of Japan”, Springer Japan (Tokyo) : 229pp.
- 鳥越皓之(編). 2006. 里川の可能性 利水・治水・守水を共有する. 277pp. 新曜社, 東京.
- 筒井迪夫. 1984. 秋田藩における森づくりの思想. 森林文化研究 5 (1) : 243-245
- 山口隆治. 2003. 加賀藩林野制度の研究. 500pp. 法政大学出版局, 東京.
- 山本勝利. 2001. 里地におけるランドスケープ構造と植物相の変容に関する研究. 農環研報 20 : 1-105.
- 山下洋(監)・京都大学フィールド科学教育研究センター(編). 2007. 森里海連環学. 364pp. 京都大学学術出版会, 京都.
- 柳哲雄. 1998. 沿岸海域の里海化. 水環境学会誌 21(11) : 703.
- 柳哲雄. 2006. 里海論. 102pp. 恒星社厚生閣, 東京.

著者: 中村俊彦 〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2 千葉県立中央博物館 nakamura@chiba-muse.or.jp, 本田裕子 〒260-8682 千葉市中央区青葉町 955-2 千葉県立中央博物館内 千葉県環境生活部自然保護課生物多様性戦略推進室生物多様性センター y.hnd21@mc.pref.chiba.lg.jp

“The glossary and phylogical history of SATOYAMA and SATOUMI.” Toshihiko Nakamura, Natural History and Museum and Institute, 955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682 Japan. E-mail: nakamura@chiba-muse.or.jp; Yuko Honda, Chiba Biodiversity Center, 955-2 Aoba-cho, Chuo-ku, Chiba 260-8682, Japan. E-mail: y.hnd21@mc.pref.chiba.lg.jp.